

バルセロナ滞在記

2007

ユキーナ・富塚・サントス



1	プロローグ（大聖堂より面白い本）	3
2	ガウディからの伝言	5
2.1	サグラダファミリア	5
2.2	放物線を使ったデザイン	6
2.3	明日は今日よりいいものを！	7
2.4	建物自体が巨大な楽器	9
2.5	日本人のいい仕事	10
2.6	ガウディの意思 生誕の門	11
2.7	暴力とお金	13
2.8	近くには見えない母の愛、ペリカンが語る	14
2.9	楽器サグラダファミリア内装	16
2.10	見るべきは地下	18
2.11	カトリックの肝 マリア信仰	19
2.12	物欲と幸せ	20
3	グエル公園	22
3.1	流線型の美	22
3.2	布施 壊れやすいものを大切に扱う心	23
3.3	自然に溶け込む回廊	24
3.4	なぜか YAZAWA のグエル公園	25
3.5	おもしろおかしく生きるのか？時間をとめる生き方をするのか？	28
3.6	ガウディの椅子	29
4	スペイン・雑感	31
4.1	カサ・ミラ 南欧の午後	31
4.2	ミロ美術館「私はそこから出発した」	32
4.3	エル・グレコとスペイン人	34

1 プロローグ（大聖堂より面白い本）

私のブログを読んでもらっている方には、何度も引用させていただいているので、またかと思われるかもしれない。

ヨーロッパなどキリスト教の影響が強く残る国を旅する前に、ぜひ読んでいただきたい本がある。ケン・フォレットの「大聖堂」は大長編歴史ロマンであり、私も入院中の友達へのお見舞いに持っていったりと自分で読む以外にいろいろ活用させてもらっている。



これは大聖堂を建てる石工の話がメインでありながらアドベンチャー、ロマン、スリルとサスペンス？もあり、続きが気になってしょうがないのでたちまち読んでしまおう、本当に面白い本だと思っている。

だが、ここ南仏からバルセロナに向かう列車の中で、実は私はこれよりももっと面白い本を読んでいる。

「ガウディの伝言」外尾悦郎著、光文社新書は、建築家ガウディの生き方、信念を彼の建築に携わった彫刻家の立場から描いており、今の自分が信条としていることとピッタリ重なっているのので、ページをめくるたびに、やっぱりそうだよなあと思感を感じるのである。

もっとも自然と人との真実をこれだけ離れた国、ヨーロッパで、しかもこの時代に見抜いていた、そういう人物がいたということが、私には新鮮な驚きとともに感動でもあった。

外尾さんの語り口調は、適切であって無駄がない。難しい言葉、固い言い回しは使わず、ガウディの思想をシンプルな形にして理解してもらおうという、読者に配慮した優しさがある。それなのに、押し付けや決め付けが無く謙虚で品がある。

なるほど、ガウディの建築に埋まっている人とはこういう人であったのか、彼が日本人であるということ、それだけでも感動に近い驚きであった。

出発前にネットでこの本の存在を知る。本当は旅の準備としてこうした本を読み、気持ちと知識を盛り上げるのが理想なのだろうと思う。けれども、これも私の旅にはありがたいことなのだが、あれやこれやバタバタしているので、必要最低限の事しかできず、なんとか成田に駆け込む・・・今回もまたこんなパターンであった。

成田では、クレジットカード会社に出頭？し、免税店での割引チケットとウエットティッシュ、行き先の街のガイドなどをもらう。私はJCBを持っているので、いつもここで登録するが、8000円以上の買い物で1000円の割引なので、化粧品の類はだいたい成田で8000円ジャストくらいの買い物をし、12.5%の割引率を得ることを常としている。

ウエットティッシュも、おシボリがでてくることは滅多に無い海外のレストランではこれまた必携である。自分で準備しようと思うと、ドラッグストアに行くという用事が増えるので、成田でゲットできればそれに越したことは無い。ワンパックでだいたい用が足りる。なくなったら、毎回手を洗いにいけばいいだけの話になる。

自分が用意したガイドブックに地図が載っていないこともあるので、こうしたメジャー都市を集めてある地図は非常に重宝する。帰りは荷物が重くなるので捨ててくれれば良く、持っていてとりあえずはジャマになるものではない。

カードの登録の次は両替をする。カードが使えないこともあり、いわゆるマーケット（青空市）では現金しか使えないので、私は思ったよりも多めに換えることにしている。今回の旅行でも、多めに換えたにも関わらず、最後の方ではやはりキャッシュが足りないなあという思いがあったので、やはりキャッシュは多く換えるに越したことはない、と思っている。もっとも注意すべきはその保管方法で、私はゲートを越えて飛行機の搭乗を待つ間、トイレに入って、早々にこのお金たちを分散させた。

靴の中敷から貴重品ベルト、かばん、歯磨きセットの中、あとで自分が混乱しないように、ちょっとメモでも取りどこに何があるかわかるようにして、早く分散させておくことを勧める。これは日本に居るうちにやった方が良い。現地ではいろいろやることがあり、まず海外で最初に足を踏み入れる空港というのは、スリも善人もいろんな人がウヨウヨしているので、まずもって危ない目にあいやすいからである。

2 ガウディからの伝言

2.1 サグラダファミリア

カードとキャッシュを手に入れたら、後は懸案事項になっていた物品をゲットする。人によっても違いうだろうが、乾電池とかコンタクト用品とか、（もっとも液体コンタクト用品は預け荷物に入れることになるが）、これだけは無くては困るものを確保しておかなければいけない。

ほとんどの場合、私はあまり物を買わないので、この日に買わなければいけないものは、この「ガウディからの伝言」だけであった。この本が空港の本屋にあるとは限らないのだが、どういう訳か、私はおそらく見つかるだろうと直感し、事実、新書版の棚に一冊だけ並んでいるこの本を手にとって、早々に本屋を後にできたのである。

この本を実際に読み始めたのは、フライトの最中、ちょうど見たかった映画も終わってしまったので、さて何をしようかと思っていたときに、この本の存在を思い出したのである。

私がよくとるアプローチなのだが、まず目次をみて、最終章「永遠に満たされていくもの」から読み始めた。もしかしたらこの本をバルセロナ着まで読みきれないのではという懸念があったもの確かだが、このタイトルがまず、すーっと目に、もっと言えば、目を通じて捉えている脳の感覚に入ってしまったからである。

最終章は筆者のこれまでの分析の総まとめ的のところであるので、言わんとしている内容は良く判った。ガウディの人となりも、私が思っていた以上に、いや、想像をはるかに超えて、まったくその通りと私が共感できる人物であったことも、確信をもってわかった。

だから最終章を読んでなおさら、最初からじっくりと読んでみたくなったのである。

たとえば下記のようなくだりは、まったくダッコー（同感、わかった、そのとおり、を意味するフランス語）なのである。

「自然は秩序があるが、すべてがまったく同じではない。個々が奔放な個性をもち、それが豊かな魅力になっている、これと同じ考えで建物をつくろうというのがガウディのアイデアです。」

はいはいその通りです、だから、シミラリティすなわち他と同じであることを求められる社会には、たまらない不自然さを、居心地の悪さを感じるのであります。私は心の中でこうつぶやきながら、ページをめくっていったのである。

2.2 放物線を使ったデザイン

「ガウディは（放物曲面をつかった）この構造を自然から学んでいます。木にしても動物の体にしてもそうですが、自然界には、重いものを細かい柱や壁で垂直に支えるという構造は存在しません。必ず角度をなめらかにしてささえているはずで。人間だけがその秩序に反するような構造体をつくる。それはとても非合理的なことだとガウディは考えていました。」

繰り返しになるが、まったくもってそのとおり！！である。自然の法則に反したところに身をおくと、本当に不安定な不自然な気持ちになる。この構造体は建物のみを言うのではない。組織やグループ、会社など有機的な統合体についてもいえることなのである。

ガウディの建築について、はは一恐れ入りました、と感心してしまうのは建築のシンボル性である。デザイン的にも自然の法則に沿っている、だからそれが構造的に最も理想的な形になっている。さらにはその形にはきちんとした、立派な意味がある。象徴としての役割を果たしているのである。

たとえばサグラダファミリアのすぐ右側にたつ建物、シェル型の滑らかな曲線を組み合わせた屋根構造を持っているのだが、これが雨をスムーズに落とし、太陽の光を柔らかく受け、なおかつ構造上最もしっかりしている、強度の面でも申し分ない、というそれだけの意味ではないのだ。

建物がシンボルとしての意味を持っている。この屋根の形は上からみると、三つのハートの重なりに見える。それはイエスとマリアとヨセフ、聖家族のシンボルになっている。

デザインと強度とシンボル、これらがすべて別々の問題として存在するのではない。すべてはひとつの秩序の中に存在すること、これを理解できない人間が各要素を取り出して、不自然なものを作る・・・こうしたくだりを読んだとき、このガウディという人は真の天才だなあと思ったのである。「」内はすべて「ガウディからの伝言」より引用